

〈報告〉

短編映画『Vampire Bus Stop』制作プロジェクトの報告

島田英二*

Production report of the short film “*Vampire Bus Stop*”

Eiji SHIMADA*

要旨

本稿は、2019（令和1）年9月から2020（令和2）年3月にかけて北海道情報大学情報メディア学部情報メディア学科の映像表現系ゼミナール（島田ゼミ）において制作した実写短編映画『Vampire Bus Stop』（2020）制作プロジェクトについて報告する。本稿では映画制作のワークフローに従い、作品が完成するまでの過程とプロジェクトの成果について主に記載した。完成した作品は第15回札幌国際短編映画祭に入選し、2020（令和2）年10月に上映された。

Abstract

This paper reports on the production of the short film, *Vampire Bus Stop (2020)*, produced by Eiji Shimada’s seminar (Faculty of Information Media, Hokkaido Information University) from September 2019 to March 2020. The following topics are discussed: planning, pre-production, shooting, and editing. This film was nominated and screened in the 15th Sapporo International Short Film Festival and Market (SSF) in October 2020.

キーワード

映画制作 (Film Production) 短編映画 (Short Film) 映画演出 (Direction) 映画祭 (Film Festival)

* 北海道情報大学情報メディア学部 准教授, Associate Professor, Department of Information Media, HIU

1. はじめに

北海道情報大学では2011（平成23）から学生のコンテスト参加支援制度を開始した。これを受け筆者のゼミナール（以下島田ゼミ）では毎年、15～20分程度の短編映画を制作し、札幌国際短編映画祭へ出品している。本稿では、2019（令和1）年に制作を開始し2020（令和2）年に完成した短編映画『Vampire Bus Stop』の制作プロジェクトについて報告する。

2. プロジェクトの流れ

本プロジェクトは以下の流れで行った。

- ①企画開発, ②プロット開発, ③脚本執筆,
 - ⑤プリプロダクション, ⑥撮影, ⑦編集,
 - ⑧映画祭への応募, ⑨映画祭への参加
- プロジェクトの目的は第15回札幌国際短編映画祭へ出品するための作品制作と映画祭への参加である。

2-1 企画開発

2019年の島田ゼミ生は当時3年生8名であった。企画案提出の課題を課し、初期案として10案が集まったが、この段階で決定的なものなかったため、企画を絞りながら次回までにプロットを書いてくることとし、次回新規案を持ってくることも推奨した。

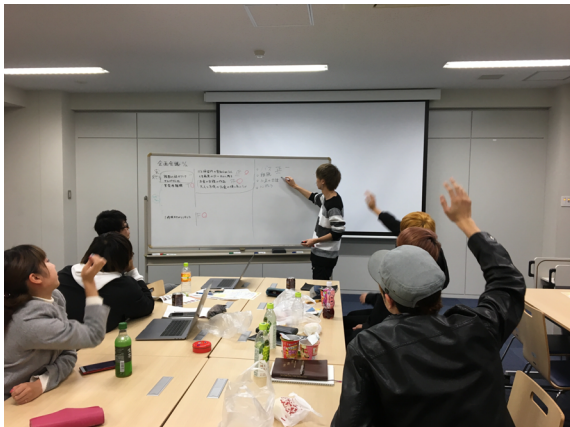


写真1 第一回企画会議

この段階ではコメディ的な案も多く、「北海道が右半分になる」「日本があひるに支配される」「お金の行方を追いかける」といったユニークな案もあった。こうした自由な発想から実際に撮影する案を選んでいった。二回目の案出し（写真1）では、お金の行方の物語のアイデアが3つと、新規の案が2つ発表された。この新規2案のうちの一つであった「停留所」がチームに支持され、今回制作する企画として採用した（写真2）。

停留所

ある日、小説家の主人公はネタがつまり気分転換に外に出かけた。主人公は停留所に座り小説を読む。そこに一人の女性が電話をしながら入ってきた。内容はわからないが何やら怒った口調で話していた。電話を切るとその女性はベンチに座りため息をつく。そのあとに目から涙がこぼれ落ちる。主人公は正面面倒だから関わりたくないと思っていた。しかし、向かいで泣いている人がいては集中して小説が読めない。主人公は立ち上がり、その人にハンカチを渡す。女性は最初は驚いたがそのハンカチを受け取り涙を拭く。主人公はハンカチを渡すとすぐに自分が座っていた場所に座り小説を読み直す。これで集中して読めると思った矢先に声をかけられる。その声はさっきの女性だった。その女性は主人公に向かって礼をしたいからこのあと時間があるかを尋ねてくる。

写真2 「停留所」発表プロット

2-2 脚本執筆

プロットをもとに脚本を執筆する。登場人物は小説家の大家樹（いつき）と販売員の鈴木ゆきの2名で、執筆に行き詰まった小説家と女性がバス停で出会うというあらすじであった。脚本会議ではここからビートフローをチェックし、本作のコンセプト「共生」「共感」というテーマを導き出した（写真3）。第2稿では2人はバーで話をするだけであったが、改稿する中で作家のイメージを妄想

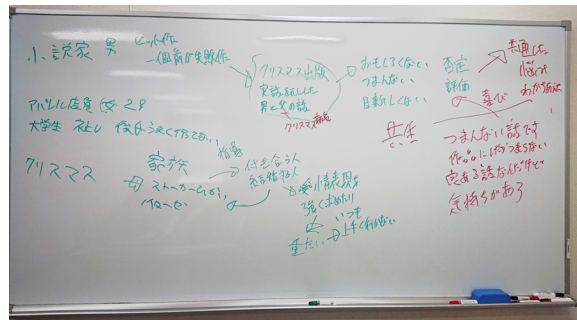


写真3 脚本会議の板書

としてインサートする構造となった。第4稿では樹の妄想内容としてファンタジーとホラーを1回ずつ挟む構成とし、映像的に複数のジャンルが混成するものとした。第4稿を修正して決定稿とし脚本は完成した。またこの次点でタイトルを「停留所」から「Vampire Bus Stop」に変更した。

2-3 スタッフィング

脚本を執筆した学生を監督とし、撮影、照明、録音などの技術部は希望者を募った。撮影経験が最も豊富な学生は撮影監督として配置し技術的にバックアップ可能なポジションとした。プロデューサーはチームの中で最も対外的に活発な学生が担当することとなった。8名の分担で制作部の人員が不足したが、先輩と後輩に参加してもらい補強した。

2-4 予算・経費

本プロジェクトの制作予算は、本学から助成金約20万円、大学祭での売上金2万円、学生から12万円（ひとり1万5千円×8名）の合計34万円であった。これらを各費目に割り振って各部予算とした。撮影機材を学生所有のBlackmagic Pocket Cinema Camera (BMPCC) 4Kとしたため、その分バッテリーなど周辺機材や照明機材、照明フィルター等に回すことができた。今回はヴァンパイアが登場するため特殊メイクがあり外部スタッフを入れる想定で予算を確保した。

2-5 キャスティング

主な俳優は2名であったため、キャストリング会社に依頼して候補者を探した。送られてきた書類の資料から絞り込み、候補者から本読みの動画を送ってもらい、それらをオーディション資料としてキャストを決定した（写真4）。その他のキャストリングはバーテンダーやバーの客であったため、スタッフが知人に声がけして参加してもらった形とした。



写真4 オーディション映像の共有

2-6 ロケーション・ハンティング

主なロケ地はタイトルにも入っている「バス停」と、登場人物が飲みに行く「バー」の2箇所であった。バーに関してはプロデューサーの学生がアルバイト先から撮影許可を得られたためスムーズに決めることができた。バス亭に関しては、バス停でない場所をバス停のように見せる案と、実際のバス停を借りる案の2案があった。江別市に相談したところ野幌駅北口のバス停で撮影許可が得られたため、実際のバス停で撮影することとした。

2-7 撮影・照明計画

本作はすべて夜の物語であるため、撮影計画を入念に行った。バス停では改めて撮影時刻に技術ロケハンを行い、背景のイルミネーションや、バス停上部に取り付けられたダウンライトの当たり方、隣接する街頭の照明範



写真5 スタンドインでの照明チェック

困などを確認した（写真5）。バーのシーンの撮影地「スナック ALES」では貸し切りの撮影許可が得られたため、照明フィルタを使った色彩や照明を追加・間引きすることで空間全体の光を設計した（写真6）。技術ロケハンでは複数の色照明のテストと棚のLEDライトテストを行った。カラー空間のレファレンスとしては長編映画『ジョン・ウィック』（2014年）／チャド・スタエルス監督や『LOVE 3D』（2015年）／ギヤスパー・ノエ監督等を参考とした。既設のダウンライトにブラックフィルムで部分遮光を行い被写体への光の落ち方を調整した。画面の大部分を占める壁のスリット付きランプ（黄色）には緑色の照明フィルタを被せ、被写体の衣装を補色（赤）とすることでコントラストを出している。（写真7, 8）。バーの棚部分にはLEDライトを追加しガラスに光を反射させインテリアとして見せている（写真9）。このLEDライトは撮影部が電気工作で自作した。入口部分は赤色のフィルタを付け、撮影角度によって抜けの色が異なるようにした。全体としては赤と緑の印象の空間となっている（写真10）。

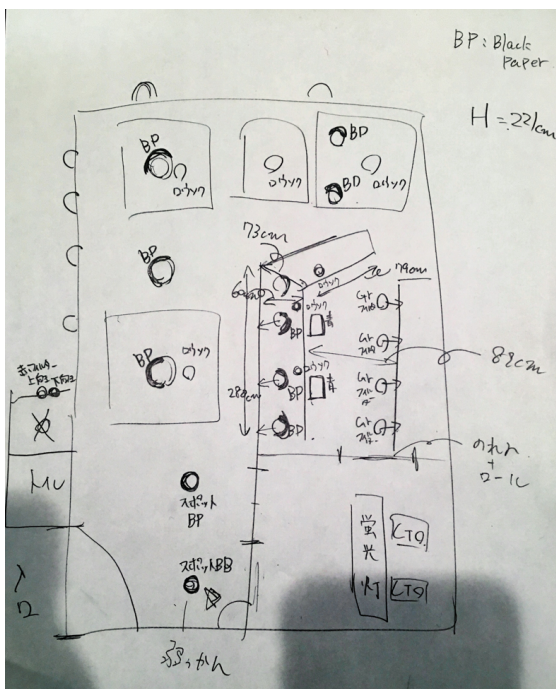


写真6 バーの照明設計



写真7 ロケ地の壁の照明



写真8 劇中の壁の照明



写真9 ロケ地のカウンター



写真10 劇中のカウンター

2-8 美術制作

今回は脚本中に小説家の妄想としてファンタジーおよびホラーのシーンがあった。ファンタジーのシーンでは女性が雪だるまに変身させられる演出があったため、美術部では雪だるまを制作した。この年は雪が少なかったため雪の多い場所で事前に大きな雪玉を作り、当日撮影地に運搬して現場で積み上げることとした（写真11）。



写真11 雪だるま用の雪玉（撮影当日）

ホラーのシーンではヴァンパイア、および拳銃の登場があった。ヴァンパイアの牙は仮装用に販売されているものを購入し複数のサイズの中からメイクと合わせて事前に方向性を決定した（写真12）。拳銃は本学のサバイバルゲーム同好会からモデルガンを借りることができた。小説家の本についてはタイトルが「喉仏にホーホケキョ」と決まっていたためそのタイトルから想起したイラストを制作しレイアウトした（写真13）。



写真12 ヴァンパイアの牙テスト



写真13 劇中の小説の表紙デザイン

2-9 撮影

撮影は2020年1月25日（土）、26日（日）、の2日間行った。前日にはオールスタッフミーティングを行い、出演者の三澤将太郎さん、丸山琴瀬さんほか外部スタッフとして札幌ビューティーアート専門学校からヘアメイク担当の村田静音さん、ゼミナールの4年生、2年生も参加した（写真14）。今回の物語は夜のバス停からバーに行くという設定であるため、全体の撮影スケジュールは昼間に屋内でバーのシーンを撮影し、暗くなると屋外でバス停のシーンを撮影する構成となった。



写真14 オールスタッフミーティング

2-10 撮影1日目

1日目はバーのシーンから撮影した。エキストラも含め約20名が入り、ほぼ順撮りで撮影していった。カメラポジションによっては椅子を移動したり照明を足したりする必要があったが、ロケセットの照明の準備が前日に終了していたため、円滑に撮影することがで

きた（写真 15, 16）。撮影終了後は一旦すべての機材を撤収し「スナック ALES」の営業開始時間前に原状復帰を行った。



写真 15 バーのシーンの撮影風景



写真 16 昼食時の集合写真

暗くなる 17 時ころには次のロケ地である野幌駅前のバス停に向かった。現場は朝から降り続いていた雪で大雪となっており、撮影の前には除雪が必要であった。除雪の器具は準備していなかったが、近隣の店舗からスコップなどを借りることができスムーズに対応することができた。撮影現場は野幌駅前のバスターミナルであり、JR の発着時には多くの利用客が往来する。歩道の上には照明用の発電機から引き込んでいた延長ケーブル等も床を走っており、歩行者の安全確保と保守のためカラーコーンと誘導員を配置した(写真 17)。撮影はバスの発着外の時間と、人通りのない

時間に行ったため想定よりも時間がかかった。



写真 17 バス停のシーンの撮影風景

2-11 撮影 2 日目

2 日目はバーの撮影から開始した。この日は日曜日で終日 ALES の撮影許可が得られており、午前中から照明のセッティングを行って午後から撮影した。外が暗くなる 17 時からビル外観で撮影を行ったが、前日の大雪の除雪で現場には大きな雪山ができていたため、ここでも除雪からのスタートとなった(写真 18)。



写真 18 ビル外観のシーンの撮影風景

19 時からは野幌駅前に移動して撮影した。この日は主に小説家の妄想シーンを撮影した。野幌駅前是一部ロードヒーティングが設置されており路面が露出していたが、前日とつながりがない妄想シーンであったため問題なく撮影できた。ファンタジーのシーンでは雪だるまへの変身シーンがあったため、屋外にク

ロマキー背景を設置した（写真 19）。撮影ではこのまま同ボジ用の背景を撮影し、合成素材として雪だるまも撮影している。



写真 19 クロマキー撮影風景

妄想のホラーシーンのヴァンパイアのシーンではアクションがあり、路面に寝転がるなど俳優の立ち位置の変化があり、今回の作品の中では複雑なカット割りとなった。導入部分はイマジナリーラインを超えてあえてバックショットで計画し、女性の顔が見えない構図とすることで不気味な雰囲気を演出した。そこからヴァンパイアが男性に襲いかかり、転倒した男性がカバンから拳銃を取り出しヴァンパイアを撃つという流れであった。途中から雪が激しく降ってきたが、これは演出的に有り難いということで、スローモーション撮影を取り入れて撮影を続けた（写真 20）。



写真 20 モデルガンを使った撮影風景

撮影は降雪と JR 野幌駅の利用客の断続的な往来、除雪車の出現等で度々中断を余儀なくされた。撮影は深夜まで及んだが、無事 2 日間で予定していた工程を終えて終了した。

2-12 撮影機材

カメラは Black Magic Design Pocket Cinema Camera 4K (BMPCC4K) を使用した。撮影は 4K UHD で Blackmagic RAW 収録、完成フォーマットは FHD でアスペクトは 16:9、FPS は 23.976 とした。

2-13 編集

編集はまずオフライン編集を行い大まかな尺調整と使用するカットを決定していった後、オンライン編集でカラーグレーディング素材に置き換えていった。場所によって合成が前提の撮影がされているため、ワークフローの中で VFX も分担して行った。

雪だるまへの変身シーンでは男性の杖から光線が出るが、撮影時に光線から受ける光を照明で顔に当てている。また呪文とともにフォーカスを送り、髪に風を当てているため、編集で効果音も加えると魔法の光線の勢いを感じさせるショットとなった（写真 21）。

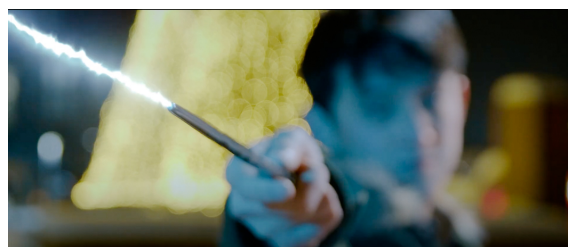


写真 21 劇中の光線のカット



写真 22 劇中のヴァンパイアのカット

ヴァンパイアの登場シーンはハイスピード撮影素材をスローモーションに変換した。降り落ちる雪の速度が変化することや、速い流れの中でここだけがスローなため印象的なカットとなった（写真 22）。拳銃の発砲のマズルフラッシュは、動作に合わせて3回合成した。光の反射や煙、銃声の効果音と合わせることで迫力を出すことができた（写真 23）。これらの妄想シーンは主人公の現実と分けるため、上下をクロップした。結果、現実世界の画面比は 16:9、妄想世界は 2.39:1 とした。



写真 23 劇中の発砲シーン

2-14 MA

音の仕上げは札幌市のスタジオ・リッチョで行った（写真 24）。現実と妄想を行き来する作品であるため、MA では2つの世界のトランジションに気をつけて作っていった。音楽のタイミングを調整したり、ノイズリダクション、尺調整で必要になった追加のセリフのアフレコ等も行った。



写真 24 MA の風景

2-15 作品情報

完成作品の情報は以下の通りである（表 1）。

表 1 作品情報

作品名	Vampire Bus Stop
長さ	14 分 17 秒
フォーマット	FHD 23.976 カラー
ジャンル	フィクション
完成年	2020 年
あらすじ	ある雪の日、ネタに詰まった小説家の大家樹はバス停で一人の女性と知り合う。冷やかして付き合ったただけだったが、彼女のつまらない話は意外にも樹のクリエイティブな脳を刺激していく。
主演	三澤将太郎, 丸山琴瀬
作品リンク	https://youtu.be/tHrFDX0cX4A

エンディングのスタッフクレジットは以下の通りである（表 2）。

表 2 スタッフクレジット(括弧内は制作当時の学年)

脚本・監督	勝山裕太(3)
助監督	酒井幸穂(3), 川上達弘(3), 小坂太我(3)
プロデューサー	酒井幸穂(3), 川上達弘(3)
エグゼクティブ・プロデューサー	島田英二
撮影監督	小俣一希(3)
撮影	兵藤大樹(3)
撮影助手	三好健太(2)
録音	小坂太我(3)
録音助手	山口摩玲己(2), 宇野裕貴(2)
照明	野澤祐聖(3)
照明助手	野見山航嘉(4), 富樫翔(4)
美術	野澤祐聖(3), 川上達弘(3), 酒井幸穂(3)
小説表紙デザイン	保坂泰温(3)
役者部	小林由奈(4), 竹田花菜シェルパ(3), 浅川優衣(2)
制作	南川大悟(4), 武内奈緒子(2), 工藤輝弥(2), 高瀬笙馬(4), 鶴田寛也(1)

制作応援	宇野裕貴(2), 浅川優衣(2), 村中涼平(4)
ヘアメイク	村田静音(札幌ビューティーアート専門学校)
メイキングビデオ	村中涼平(4), 富樫翔(4), 浅川優衣(2)
メイキング編集	野澤祐聖(3), 川上達弘(3), 小坂太我(3), 齋藤勇城(3)
MA	塚原義弘(Studio Riccio)
編集	小俣一希(3), 酒井幸穂(3), 勝山裕太(3), 兵藤大樹(3), 小坂太我(3)
Color	小俣一希(3), 酒井幸穂(3)
VFX	兵藤大樹(3), 勝山裕太(3)
車輛	勝山裕太(3), 兵藤大樹(3), 富樫翔(4), 野見山航嘉(4), 浅川優衣(2), 菅野大斗(3), 高橋匠(3), 島田英二
ロケ地協力	ALES, ブロックビル, 野幌駅
協力	スシロー江別店, 山田商店 さくらの花整骨院野幌駅前 kokomoca 江別市建設部土木事務所道路管理課 田中麻耶, 宮北秀樹, 小関高人 大川直久, 杉浦憲太郎, 北潟昌也 江別警察署, 北海道中央バス株式会社 江別市, Casting Office Egg MOVIE ing WORK Media Creative Center (MCC) 北海道情報大学

3. コンテスト応募と参加

完成した作品は第15回札幌国際短編映画祭に応募し入選した。この年の応募数は世界108の国と地域から3,854作品で過去最多であった。この年の映画祭は前年からの新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、初めてオンライン開催となったため、映画祭への参加は遠隔となった。また映画祭の開催はインターネットでのオンデマンド配信：2020（令和2）年10月10日（土）～31日（土），特別

上映会（会場：札幌文化芸術劇場 hitaru クリエイティブスタジオ（札幌市民交流プラザ3階）：10月18日（日）：4プログラム（各約90分）であった。本作「Vampire Bus Stop」は北海道セレクションのプログラムで上映された（写真25）。この年は世界的な感染症の拡大の影響で国内外の多くの映画祭が中止や延期となった。

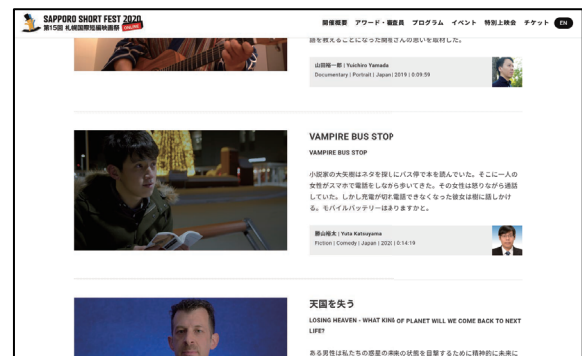


写真25 第15回札幌国際短編映画祭 WEB サイト

4. まとめ

本稿は短編映画『Vampire Bus Stop』の制作プロジェクトの企画から撮影，編集を経て作品が完成するまでの過程とプロジェクトの成果について報告した。本作はロケ地がおおよそ2箇所にとまっております。撮影許可がすぐに得られたためプリプロダクションは比較的スムーズに進行した。例年に比べるとメインスタッフが少数であったため15分以下の比較的小規模のプロジェクトにまとめられたことは良かった。制作面ではプロデューサーが野幌で活発に活動していた学生だったため、各所に交渉もしやすく、撮影許可だけでなく、冬季に問題となりやすい駐車場の交渉や緊急時の相談も柔軟に対応することができた。技術面では1年生から映像制作に携わってきた経験豊富な学生がいたため、カラーグレーディングを伴うRAW撮影もワークフローに取り込むことができた。結果的には、小作でありながら複数のジャンルを内包した映像作品の制作ができて挑戦のしがいがあるプロジェク

トになったと評価している。

本作の撮影終了後すぐに我が国でも新型コロナウイルスの感染拡大（第一波）が始まった。編集は当初、本学のメディア・クリエイティブ・センター（MCC）で行っていたがほどなく休館となった。MA 作業の際には人数を減らしマスクや手指消毒、換気することで対応したが、音データ完成後の映像のブラッシュアップ作業は MCC の休館を受け、編集作業のためにチームが集まることはできなかった。今後もこのような感染症の蔓延が続く場合、今回のように一室に 20 名が集まるような撮影は今後難しくなると思われる。そのため企画段階から感染予防の観点が必要となるかもしれないと考えさせられた。

本作は、グループ作業が困難になってからは YouTube などのビデオ共有や Google ドライブなどクラウドサービスを駆使して完成させることができた。個々の能力もあるが、学生もこうしたツールを日々使っているのも、このような点は本プロジェクトの強みであった。また本作は悪天候や急なスタッフの欠員、感染症といった不測の事態に遭いながらも予定通り完成できたことは幸運であった。これは技術の責任者と制作の責任者がストレスに強い自律的な人物であったためであり、プロジェクトの安定的運営の要因であったと考えている。最後に、このプロジェクトの参加メンバーから一名が映像業界の大手ポストプロダクション会社へ就職した。本気で映画・映像業界へ進みたい学生が学生時代にこのように挑戦できる機会があることを本学の強みとしていきたい。

参考文献

- チャド・スタエルスキ (2014) 「ジョン・ウィック」(アメリカ/101 分)
 ギャスパール・ノエ (2015) 「LOVE 3D」(フランス, ベルギー/135 分)
 ニコラス・ウィンディング・レフン (2016)
 「ネオン・デーモン」(フランス, デンマ

ーク, アメリカ/117 分)

アルフォンソ・キュアロン (2004) 「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」(アメリカ, イギリス/142 分)

クリス・バック, ジェニファー・リー (2013)
 「アナと雪の女王」(アメリカ/102 分)

謝辞

本プロジェクトを行うにあたり本学から多大な援助を頂いた。また撮影協力で全面的な協力をいただいた ALES のオーナー田中麻耶氏に深謝いたします。